

平成27年 世界遺産登録へ

明治日本の産業革命遺産
 九州・山口と関連地域

萩の産業遺産群



Sites of Japan's Meiji Industrial Revolution - Kyushu - Yamaguchi and Related Areas
 Industrial Heritage Sites in Hagi

萩市地図



まあるバス
 東回りコース(松陰先生)
 西回りコース(曾作くん)

① 観光案内所	② 文化施設	③ 国道	④ 温泉
⑤ 公共トイレ	⑥ 病院	⑦ 県道	⑧ レンタサイクル
⑨ 車いす対応トイレ	⑩ ゴリンスタフ	⑪ 公共施設	⑫ 有料駐車場
⑬ 観光案内板	⑭ 信号機	⑮ その他の施設	⑯ ビジット・シャワー室内所
⑰ 伝統的建造物群保存地区	⑱	⑲	⑳ 電気自動車用急速充電スポット

表紙/2010年 萩の近代化産業遺産絵画募集
 最優秀賞「萩反射炉」 小枝はづき(萩西中学校3年)

■観光のお問い合わせ
 萩市観光課 Tel 0838-25-3139 (平日のみ)
 (社)萩市観光協会 Tel 0838-25-1750
 NPO萩観光ガイド協会 Tel 0838-25-3527
 萩温泉旅館協同組合 Tel 0838-22-7599

■発行
 萩市総合政策部 世界遺産登録推進課
 〒758-8555 山口県萩市江向510
 Tel 0838-25-3380 Fax 0838-26-3803
 萩市HP <http://www.city.hagi.lg.jp/>

日本の近代化始まりの地萩

日本の産業化は萩藩などが幕末に自力の近代化を目指したモノづくりへの想いから始まった

19世紀末の“世界の奇跡”といわれた日本の近代化、その原動力となった産業技術の導入過程を物語る遺産を、世界の遺産として後世に伝えていくことは、私達の願いです。

萩の産業遺産群は、産業技術導入の最初期の遺産群で、「萩反射炉」「恵美須ヶ鼻造船所跡」「大板山たたら製鉄遺跡」「萩城下町」「松下村塾」の5つの資産で構成されており、幕末に西欧の技術を取り入れ、産業化を目指した地域社会の全体像とその特質を明瞭にあらわしていることに大きな価値があります。すなわち、遺産群全体が幕末当時の萩の地域社会が有していた産業化に関する政治・行政・経済・技術・人材育成の諸要素を示しています。

萩（長州）藩という地域社会が舞台となって、日本独特のものづくり文化の形成と発展が始まったのです。



萩反射炉



恵美須ヶ鼻造船所跡



萩の産業遺産群ストーリー

アヘン戦争を知ったサムライの衝撃

日本を守るために海防強化を

江戸時代末期の日本は、外国との関わりを限定した鎖国の状態にありました。しかし、産業革命を成し遂げ、植民地を求めてアジアへ進出してきた欧米諸国が、圧倒的な技術力を背景に、日本に国交を結ぶように求めています。

天保11（1840）年、清国（現在の中国）とイギリスの間でアヘン戦争が起き、勝利したイギリスは香港を植民地としました。この隣国の敗北は、欧米列強の脅威がまもなく日本にも及ぶことを意味していました。アジア大陸に近い萩（長州）藩など西南雄藩の武士達は、特に大きな衝撃を受け、海防の危機意識から自前の大砲や軍艦をつくらうと考えました。

自力の産業化を試みた“モノづくりの心”

- ①「萩反射炉」
- ②「恵美須ヶ鼻造船所跡」
- ③「大板山たたら製鉄遺跡」

危機感を抱いた萩（長州）藩の武士達は、積極的に西洋の技術を勉強し、自力で試行錯誤しながら産業の近代化に挑戦しました。

海防強化の一環として、萩（長州）藩は洋式鉄製大砲の製造を試みました。洋式鉄製大砲の製造に必要な金属溶解炉が反射炉です。萩（長州）藩は、反射炉の操業に既に成功していた佐賀藩に藩士らを派遣し、洋式鉄製大砲の造り方の伝授を申し入れましたが断られました。しかし、後に反射炉を見学することが許されましたので、反射炉のスケッチをとり、藩に持ち帰りました。このスケッチをもとに、安政3（1856）年に試作的に築造した反射炉が、現在残っている萩反射炉であると考えられています。本来の反射炉は、同じ大きさのレンガで煙突が造られますが、この反射炉は、大部分に地元の安山岩を使用し、ふぞろいのレンガも使用されていることから、藩内の石工、陶磁工、鋳物師などの職人技術を利用して自力で造られたとみられます。萩（長州）藩は、結局は技術的にも費用的にも難しいことから、本式の反射炉の建設は断念しました。萩反射炉は、萩（長州）藩が自力で産業の近代化を目指す中での、トライ&エラー（試行錯誤）の遺産といえます。失敗は成功のもとということわざがあるように、各藩がトライ&エラーを積み重ねながらも新しいことに挑戦したことで、急速な日本の産業化がなされ、遂げられたのです。

また、萩（長州）藩は、幕府の要請や桂小五郎（のちの木戸孝允）の意見により、洋式軍艦の建造を試みました。伊豆半島戸田村において、日本初の本格的な洋式木造帆船ヘダ号を建造した船大工らを招き、安政3（1856）年に、恵美須ヶ鼻に造船所を設置し、藩最初の洋式木造帆船「丙辰丸」を建造しました。さらに万延元（1860）年に、浦賀や長崎で造船技術を学んだ藩士が設計して、2隻目の洋式木造帆船「庚申丸」を建造しました。なお、近代造船史における最初期のこのような帆船は、萩（長州）藩や幕府の他にも薩摩藩、佐賀藩、水戸藩でも建造されましたが、造船所の遺構が現存しているのは唯一、ここだけです。

この丙辰丸の船釘やいかりなどに使用する鉄を供給した拠点の跡を残すのが「大板山たたら製鉄遺跡」です。たたら製法は、千年以上前からある日本在来の製鉄技術で、砂鉄を原料にして、木炭を燃焼させて鉄を作っていました。職人たちは鋳造や鍛造に高い技能を持ち、溶解鉄の特性や習性を知り抜いており、刀剣用の鉄を作ることも、鋳物や船具用の鉄を作ることもできました。幕末期における西洋技術の導入が、たたら製鉄のような在来の匠の技術に支えられて行われたのです。



萩反射炉古写真（大正10年頃）萩博物館蔵



丙辰丸（丙辰丸製造沙汰控）山口県文書館蔵



製錬作業の様子（先大津阿川村山砂鐵洗取之図）東京大学工学情報理工学図書館工3号館図書室蔵

産業化初期の舞台となった萩城下町

④「萩城下町」

産業技術導入の初期の段階は、当時の日本社会を地方ごとに統治していた藩という地域社会を単位として産業技術の導入が進められたという大きな特徴があります。萩城下町は、当時の地域社会における政治・行政・経済の姿をあらわしています。慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦で敗れた毛利輝元が、阿武川の支流、橋本川と松本川に囲まれた三角州上に萩城を建設し、城下町が計画的に建設されました。江戸時代は土農工商の身分制度が確立されており、萩（長州）藩においても、支配者層であり指導者としての地位にあった武士と町民の暮らす区域は厳格に区別されていました。以後260年間、萩は萩（長州）藩の政治、行政、経済の中心地として栄えました。

資産の範囲は、①城跡、②旧上級武家地、③旧町人地の3地区です。城跡は、西南雄藩の一つである萩（長州）藩の政治・行政の中心であり、産業化や西洋技術の導入についての藩の政策形成の場でした。萩城は、萩（長州）藩を治めた毛利氏13代の居城であり、13代藩主敬親は、萩反射炉や恵美須ヶ鼻造船所の建設を決定するなど、近代産業化のきっかけを作りました。明治7（1874）年に萩城は解体されましたが、現在まで石垣と堀は良好な状態で残っています。幕末の産業化開始時点における西南雄藩の政治的拠点の姿を今に伝える遺跡と言えます。

旧上級武家地は、城跡とともに萩（長州）藩の政治・行政の中心地であり、産業化等についての政策形成の場でした。萩城と外堀の間で藩の重臣達の家が建ち並んでいた地域で、口羽家の表門や主屋、益田家物見矢倉、周布家長屋門など、土塀や石垣、夏みかんなど周囲の環境と一体となって残っています。

旧町人地は、城下町及びその周辺で営まれていた商業活動や小規模工業を基盤とした当時の伝統的経済の姿を示しています。当時の萩（長州）藩に高度な匠の技があったからこそ、日本の産業化が急速に進んだと考えられます。この地区は、町筋が基盤目状に画され、中・下級の武家屋敷や町屋が軒を連ねていました。木戸孝允旧宅や豪商菊屋家住宅、なまこ壁の土蔵、門、土塀が連なり、町筋や家並みがそのまま残っています。

このように萩城下町は、産業化を試みた幕末の地域社会が有していた江戸時代の伝統と身分制、社会経済構造を非常によく示しているため、構成資産として位置付けられています。



「萩城下町絵図」（明治2年作成）萩博物館蔵



大板山たたら製鉄遺跡

萩城下町



松下村塾

平成27年の世界文化遺産登録を目指しています 「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」

日本は、幕末における西洋技術の導入以来、西欧以外の地域で初めて、かつ、極めて短期間のうちに飛躍的な発展を遂げました。日本が産業化を達成したことは、現在、経済大国と呼ばれる日本の礎になるとともに、世界史的な価値をもっています。

この飛躍的な発展の大きな原動力となったのが、アジア大陸に近いという地理的特性により、古くから海外との窓口として発展してきた九州・山口です。

「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」は、製鉄、造船、石炭産業の重工業部門に西洋技術を移転し、成功した日本独特のプロセスを示すもので、日本が「ものづくり大国」となる基礎をつくった歴史を物語っています。

また、本遺産は8県11市に立地し、世界的にも例のない稼働中の民間企業による大規模な工業関連施設が含まれており、わが国初の本格的なシリアルノミネーションとして世界遺産登録を目指しています。

※シリアルノミネーション：

広い範囲に分散する複数の資産を同じ歴史・文化群のまとまりとして関連づけ、数珠つなぎにすることにより、全体で顕著な普遍的価値を有するものとして推薦すること。



年表



5 「松下村塾」

萩（長州）藩において試行錯誤が続いている中、松下村塾を主宰した吉田松陰は、海防の観点から工学教育の重要性をいち早く提唱しました。これは、直接西洋人から技術を学ぶことができない制限がある中で、工学の教育施設を設立し、在来の技術者を総動員して、自力で進歩的な国づくりの実現を図るというものでした。それ以前の安政元（1854）年には、松陰はペリー提督の艦隊に紛れてアメリカへの渡航を試みました。その精神は、塾生たちに受け継がれました。

日本国内が、開国が攘夷かで大混乱であった文久3（1863）年に、「生きた器械」となると、国禁を犯し、海を渡った若い萩（長州）藩士がいます。松下村塾の塾生でもあった伊藤博文を含む5人です。彼らは後に「長州ファイブ」と呼ばれました。彼らが目指したのは産業革命発祥の地、イギリス。当時、ロンドンでは世界で最も輝いている都市でした。4階建て、5階建ての建物が並び、銀行や博物館があり、蒸気機関車が走り、馬車道をガス灯が明るく照らしていました。彼らは、日本とイギリスとの国力があまりにも違うことに愕然とし、西欧の近代文明を積極的に学んで日本を強い国に発展させようと決意したのです。5人は帰国後、日本の近代化・工業化の舵取りとしてそれぞれの道で大きな功績を残しました。



その後の日本の急速な産業化

製鉄 は工業国家日本を支える屋台骨へ

安政4（1857）年、大島高任が岩手県釜石市の洋式高炉で、日本で初めて鉄鉱石を原料にした製鉄に成功しました。その技術は、明治34（1901）年に操業を開始した官営八幡製鉄所に引き継がれ、巨大な産業システムとなりました。製鉄の技術は鉄道を敷き、船や蒸気機関をつくるためにも利用され、工業国家日本を支える屋台骨となりました。

造船 大国日本へ

幕末の日本では、木造帆船は造れても、まだ鉄製蒸気船を造る技術はなく、また財政負担の重さから外国船の購入へと転換していきました。しかし、古船が多く故障が絶えないため、薩摩藩とイギリス人トーマス・グラバーによって、1868年に長崎市の小菅に修船場が造られました。後に長崎造船所へと発展しました。造船技術は鉄製汽船、鋼船と近代化され、わずか50年余りで、日本は西欧と肩を並べる造船大国になりました。

石炭 が時代を動かす

製鉄、造船の近代化が進むにつれて、エネルギー供給源としての石炭の産業化が進みました。蒸気原動力となる石炭は、かつて黒ダイヤと呼ばれていました。九州北部の炭田、特に高島炭鉱と三池炭鉱は日本で最も高品質で安価な石炭が豊富な鉱床でした。また、アジアの大きな市場に近いこともあり、明治末頃には、日本はアジアで最大の石炭産出国となり、九州の石炭は日本の生産量の9割近くを占めました。

長州ファイブ

長州ファイブと呼ばれた彼らは、帰国後、海防強化だけでなく産業の近代化に取り組みました。伊藤博文は初代内閣総理大臣、井上馨は外務・大蔵大臣、遠藤謹助は造幣局長、井上勝は鉄道庁長官となり鉄道の父といわれ、山尾庸三は工部卿（卿は現在の大官）となり工業の父といわれ、それぞれの分野で近代化に大きく貢献しました。彼らのサムライとしての強い使命感と冒険心を併せ持つ若さの力が、新しい日本の創造を可能にしたのです。

文久3（1863）年
ロンドンで撮影された「長州ファイブ」（萩博物館蔵）



世界遺産とは

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、次の世代に引き継いでいくべき人類共通の宝物です。ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が世界遺産条約に基づいて、毎年1回登録を行っています。世界遺産には「文化遺産」「自然遺産」「複合遺産」の3種類があります。

平成26年2月1日まで
ユネスコ世界遺産センターへ推薦書を提出

約1年間
イコモス（国際記念物遺跡会議）の審査
（夏～秋に現地調査）

平成27年夏
第39回世界遺産委員会において登録可否決定

登録までの主な流れ

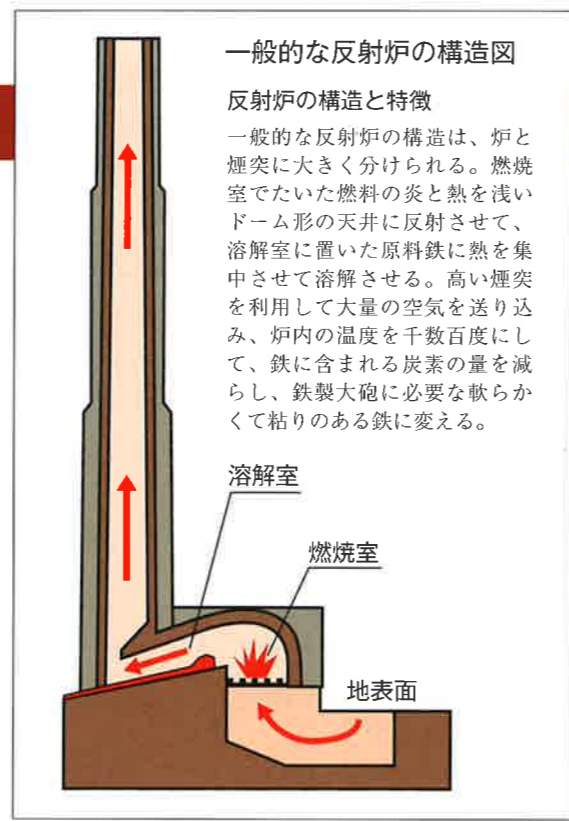
世界遺産候補の資産

1 萩反射炉

反射炉は鉄製大砲の鑄造に必要な金属溶解炉で、萩藩の海防強化の一環として導入が試みられました。萩（長州）藩は、反射炉の操業に成功していた佐賀藩に大工棟梁を派遣し、反射炉をスケッチして持ち帰ります。現在残っている遺構は煙突にあたる部分で、高さ10.5mの安山岩積み（上方一部レンガ積み）です。オランダの原書によると、反射炉の高さは16mですから約7割程度の規模しかありません。また、萩（長州）藩の記録で確認できるのは、1856（安政3）年の一時期に試みに反射炉が操業されたということだけであることから、萩反射炉はこのスケッチをもとに試作的に築造されたと考えられています。

現存するのは葦山（静岡県）と萩の2か所だけで、我が国の産業技術史上大変貴重な遺跡です。

◆萩市大字橋東4897-7ほか
萩市内中心部から北東へ約5km P有り（無料）



2 恵美須ヶ鼻造船所跡

1853（嘉永6）年、幕府は各藩の軍備・海防力の強化を目的に大船建造を解禁し、のちに萩藩に対しても大船の建造を要請しました。1856（安政3）年、萩（長州）藩は洋式造船技術と運転技術習得のため、幕府が西洋式帆船の君沢型（スクナー船）を製造した伊豆戸田村に船大工棟梁の尾崎小右衛門を派遣します。尾崎は戸田村でスクナー船建造にあたった高崎伝蔵らとともに萩に帰り、近海を視察、小畑浦の恵美須ヶ鼻に軍艦製造所を建設することを決定しました。同年12月には萩（長州）藩最初の洋式軍艦「丙辰丸」（全長25m、排水量47t、スクナー船）が、また1860（万延元）年には2隻目の洋式軍艦「庚申丸」（全長約43m）が進水します。丙辰丸建造には、大板山たたら鉄が使用されたことが確認されています。現在も当時の規模の大きな防波堤が残っています。

図面：造船所見取図（「丙辰丸製造沙汰控」（山口県文書館蔵）より作成、スクーザル打建木屋：船の組み立てを行う施設＝ドック
蒸気製作木ヤ：鉄製の羽釜で湯を沸かした蒸気で船材を曲げるための施設
絵図木屋：原寸大の図面を起こすところ
切組木屋：製材した部材を組み立てる作業場
綱製作木屋：船のロープを作る施設）

◆萩市大字橋東5159-14ほか 萩反射炉から海側へ約0.7km 大型車通行不可



庚申丸
（大艦製造一件沙汰控）山口県文書館蔵

3 大板山たたら製鉄遺跡

砂鉄を原料に、木炭を燃焼させて鉄を作っていた江戸時代の製鉄所の跡です。日本の伝統的な製鉄方法は、鉄の原料である砂鉄と燃料の木炭を炉に入れ鑪を用いて行います。この時に使う炉を「たたら」と言います。宝暦期（1751～1764年）の8年間、文化・文政期（1812～1822年）、幕末期（1855～1867年）の3回操業していました。原料の砂鉄は島根県から北前船を利用して奈古港に荷揚げされ、荷駄で運ばれていました。建物跡などの遺構が露出した形で整備されています。

図面：保存整備図（高殿：中心施設で製鉄炉と天輪鑪があった
砂鉄洗場：砂鉄を水洗いして不純物を取り除く
鉄池：製鉄炉でつくられた熱い鉄の塊を水で冷やす
元小屋：事務所的機能を持つ施設
鍛冶屋：製鉄作業で使われる道具を作ったり修理する）

◆萩市大字紫福257-5ほか（山の口ダム北側）萩市内中心部から北東へ約23km 狹隘な道のため中・大型車通行不可 P有り（無料、普通のみ）



4 萩城下町 城跡

藩主居館や藩政の中心機関があった本丸や二の丸があった地区で、この一帯は国の史跡に指定されています。

指月山の麓に、1604年（慶長9）毛利輝元が築城して以来260年間、毛利氏歴代13代が居城としました。1874（明治7）年、全国に先駆けて、萩（長州）藩のシンボルであった萩城を解体し、石垣を残すだけとなった城跡は、萩（長州）藩における近代化のストーリーの終焉と言えます。本丸は現在、指月公園として整備されており、春には600本余りのソメイヨシノが咲き誇ります。
◆萩市大字堀内1ほか 観覧料大人210円 P有り（普通300円、大型1,000円）



4 萩城下町 旧上級武家地

萩城と外堀の間に、毛利一門をはじめとする藩の重臣達の侍屋敷が建ち並んでいた地区です。この一帯は旧三の丸にあたり、「堀内地区」とも呼ばれ、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。城下町の侍屋敷としての地割をよく残しており、土塀越しにみえる夏みかんとともに当時の風情をよく伝えています。

この地区の南西には、上級武士の屋敷であった口羽家住宅（国の重要文化財）や道を鍵の手に曲げて迷路のようにして敵を追い詰める「鍵曲」があります。口羽家住宅には主屋となまこ壁のコントラストが美しい雄大な表門があり、庭から眺める河畔の景色は絶景です。

◆口羽家住宅観覧料100円



4 萩城下町 旧町人地

萩城外堀の外側にあり、町屋や中・下級の武家屋敷が軒を連ねていた地区です。この一帯は「萩城下町」として国の史跡に指定されています。

町筋は碁盤目状になっており、菊屋横町、伊勢屋横町、江戸屋横町という小路があり、明治維新の3傑と呼ばれた木戸孝允の旧宅、豪商菊屋家の住宅などの建物や、なまこ壁の土蔵、門、土塀が連なり、当時の城下町の景観を今に残しています。

◆菊屋家住宅観覧料500円 旧宅等観覧料各100円 P有り（普通300円、大型1,000円）



5 松下村塾

萩藩の兵学者吉田松陰が主宰した私塾です。木造瓦葺き平屋建て50㎡の小さな建物で、8畳の講義室と10畳半のひかえの間があります。

萩が生んだ幕末の志士吉田松陰は、萩（長州）藩が明治維新を推進した原動力となった人材を育てた人物です。ペリーが再来航した1854（安政元）年、松陰は25歳のときに伊豆下田でアメリカ艦船に乗り込み海外渡航を試みましたが失敗に終わり投獄され、のちに許されて実家（国史跡 吉田松陰幽囚ノ旧宅）に謹慎となりました。謹慎していた1856（安政3）年から門人への指導を開始し、1857（安政4）年に現存する塾舎に移りました。1858（安政5）年に閉鎖されるまでの約2年10か月の間に約90名の門人に教えました。塾生からは倒幕の指導的役割を果たした高杉晋作や、明治政府の初代内閣総理大臣となった伊藤博文などを輩出しました。そのほか、日本の近代化、工業化の過程で重要な役割を担った多くの逸材がここで学びました。

◆萩市大字橋東1537-1 市内中心部から東へ約1.5km P有り（普通無料、大型1回500円）



関連資産

6 萩博物館

旧上級武家地にあり、外観もなまこ壁やいぶし銀色の瓦が相まって気品と美しさに溢れています。産業遺産に関わるものや歴史、民俗、自然など萩に関わるものが幅広く展示しており、萩のことを知るにはここが一番です。
◆萩市大字堀内355 入館料大人500円 P有り（普通300円、大型1,000円）



7 郡司鑄造所遺構広場

郡司家は萩（長州）藩お抱えの鑄物師で、鍋・犁・梵鐘のほか大砲などの兵器の鑄造を営んでいました。1853（嘉永6）年のペリー来航をきっかけとして幕府が公布した「洋式砲術令」によって、同年11月、萩（長州）藩は郡司鑄造所を藩営の大砲鑄造所に指定し、多くの青銅製大砲を鑄造しました。ここで鑄造された大砲は、江戸湾防備のため三浦半島に設けられた萩（長州）藩の陣屋に運ばれ、また1863（文久3）年、下関海峡での外国船砲撃、1864（元治元）年、同海峡での英・仏・蘭・米連合艦隊との戦争（下関戦争）にも使用されました。郡司鑄造所は在来技術である「こしき炉」によって西洋式大砲を鑄造しており、近代技術へと移行する過渡期を物語る産業遺構として貴重なものです。
◆松下村塾の北側隣り



8 旧萩藩校明倫館（国史跡）

萩の中心部にあり、藩によって科学技術や教育振興が行われていた、全国有数の規模を誇る藩校でした。当時の「有備館」（剣術稽古場、坂本竜馬も試合をしたといわれている）や南門、また、全国で現存する唯一の水中騎馬練習場の「水練池」などがあります。
◆萩市大字江向602



9 旧萩藩御船倉（国史跡）

廻船業や漁業などで栄えた「浜崎地区」にある藩主の御座船を格納した場所です。萩城築城後、まもなくして建てられました。両側と奥に玄武岩で壁を築き、上部に瓦屋根を葺き、前面は木製扉です。近代化以前における最大級の船の大きさが窺えます。周辺は国の重要伝統的建造物群保存地区になっており、江戸時代から昭和初期に建てられた建物が多く残っています。
◆萩市大字東浜崎町127



10 旧湯川家屋敷（市史跡）

江戸時代中期に造られた人工の用水路「藍場川」の最上流にある武家屋敷です。主屋や屋敷のほかに、川の水を利用した台所や風呂場、庭園なども見所です。
◆萩市大字川島67 観覧料100円、P有り（無料、普通のみ）



11 伊藤博文旧宅・別邸（国・市史跡）

伊藤博文は松下村塾で学び、幕末に西洋の知識を身に付けようと国禁を破って英国へ密航留学した萩（長州）藩の5人の若者「長州ファイブ」の一人です。その後、明治政府では工部卿に就任し、殖産興業政策を推進して工業国家・日本の礎を築き、のちに初代内閣総理大臣となりました。旧宅は茅葺き平屋建てで、隣接地には東京にあった広大な別邸の一部が移築されています。
◆萩市大字橋東1511-1 観覧料100円 P有り（無料、普通のみ）

